

第54回 スイス史研究会 報告要旨

1942年8月の国境封鎖をめぐる議論
—ドイツ語圏の新聞報道の展開過程と国民議会の議論を中心に—

穂山 洋子

日時：2006年7月1日（土） 14時～

場所：日本女子大学「百年館」3階 302会議室

1. 研究の背景

1942年8月4日、スイス連邦内閣は国境の封鎖を決定し、不法入国する難民の即時の入国拒否と国外退去を決定した。この決定は、対象の難民が深刻なハンディ（生死にかかわる危険）を負うことになっても実行されなければならないと定められた。フランスでナチス・ドイツによる外国籍のユダヤ人の大量逮捕と強制移送が始まり、多くのユダヤ人がスイスに避難場所を求めてスイス国境に殺到したことに対する措置、および以降予想される殺到に対する予防措置として、この決定は下された。

8月13日に外国人問題及び難民問題の担当であった連邦司法警察省警察局長から、各カントン警察に国境封鎖の指示が出されると、政治家、著名人、宗教家など各方面から抗議の声があがった。新聞紙上でも8月下旬からほぼ全ての新聞でこの問題が取り上げられ、一連の報道キャンペーンへと発展して行った。それらの主張のほとんどが、生命の危機にある難民を国境で追い返す行為は、スイスの人道主義の伝統と相容れないものである、というものであったが、その一方でスイスの国益の問題も議論されていた。各方面からの抗議を受け、連邦内閣はその10日後には、この厳しい政策運用の緩和を指示することとなった。

翌9月22日、23日の国民議会では、1933年以降初めて難民問題が議論されることになった。しかし当初連日のように難民問題を取り上げていた各新聞は、一時的な政策運用の緩和が発表されると、次第にこの問題を取り上げなくなり、急速に議論が収束に向かってしまった。つまり人道主義と国是の間の折り合いをつける形で収束してしまったのである。

2. 問題設定と研究方法

本報告では、1942年8月の国境封鎖をめぐる新聞報道の展開と9月の国民議会の議論を分析し、報道の過程と政治決定の過程を明らかにし、スイスの難民策に影響を与えた概念や説明様式を踏まえて、そこで行われていた議論の本質について考察する。その際、以下の点を明らかにしたい。①なぜ国境封鎖をめぐる議論がこれまでにない規模で起こり、また早急に収束したのか。②なぜ議論の中心がスイスの人道主義であったのか。③この議論の歴史的な重要性はなにか。

難民政策に影響を与えた3つの概念や説明様式にかんしては、まず、20世紀のスイスの政治文化に大きな影響を与えた「よそ者過多（Überfremdung）」という概念の歴史的な背景と当時の難民政策に与えた影響を、次に1942年8月議論の中で厳しい難民政策と対比して語られた、スイスの人道主義を歴史的な経緯と第二次世界大戦中のその意義、そしてスイスの難民政策方針であった「経由国構想」について考察した。

分析の対象とした新聞は、自由民主路線で知識人やビジネスマンを読者層に持つチューリヒ発行のノイエ・ツルヒャー・ツァイトゥング、自由・保守系のバーゼル発行のバースラー・ナーハリヒテン、スイス社民党機関紙でベルン発行のベルナー・タークヴァハトの路線と地域の異なる三紙と選んだ。

3. 結論

国境封鎖に対する激しい抗議が起こった背景の一つは、新聞紙上や議会でも議論されたように、難民の追い返しはスイスの伝統である人道主義とは相反するものであったからである。また、難民政策とは直接関連付けられてはいなかったが、この時期にユダヤ人迫害の情報が新聞に掲載され、国民の多くがユダヤ人の状態について、多かれ少なかれ情報を得ていたことも重要な要素である。しかしながら、難民問題の議論の中心にあったのは、特に市民的な新聞で、戦争や迫害の被害者の救済というよりも、自分たちのナショナル・アイデンティティ（人道主義＝「スイス的なもの」）の侵害が議論されていたのである。この背景には、スイスの人道的な歴史や庇護の伝統が、ナショナル・アイデンティティを高めるための「精神的国土防衛」の運動の一環として強調されていたことがある。多言語、多文化、多民族であるスイスの多様性は、隣国の戦争という危機的な状況下で、スイスの内部分裂を引き起こす可能性を持っていたのである。その分裂を避けるために、それぞれの言語や文化を越えた「スイス的なもの」で互いを結束させようとしていたのである。

1942年の難民問題にかんする議論が急速に収束してしまった理由は二つあると考える。一つは国境封鎖の発表から10日後に、政策運用が一時的にも緩和されたことで、ある程度の要求は満たされたためである。そしてもう一つは、スイスの人道主義の伝統は守りたいが、無制限の難民受入は不可能であるという一定のコンセンサスが政治レベル、新聞レベルともにあったためである。

この新聞報道を含む1942年晩夏の難民問題にかんする議論が、スイスの難民政策自体にどのぐらいの影響力があつたかといえ、一時的な政策緩和をもたらしたとはいえ、年末には再び厳格化してしまった事実を鑑みれば、ほとんど影響はなかったと言わざるを得ない。しかし、この難民政策にかんする政府及び新聞の議論が、スイスの難民政策をめぐる議論の中でも最も重要な議論の一つであると考えられる。その理由は三つある。まず、この時期に集中的に行なわれた難民問題にかんする議論は、質的にも量的にも一番の盛り上がりを形成しているという点。二つ目は、1941年末からスイスの政府は、ドイツ及びドイツ占領地でのユダヤ人迫害の情報を得ており、1942年7月からはほとんどの新聞でフランスでのユダヤ人迫害の様子を伝えていた。つまりこの時期初めて、ユダヤ人の迫害がスイスの難民政策と関連性を持った点。最後に、数世紀にわたる亡命者受入国として、スイスの人道主義の真価が問われ、政府レベルのみならず、国民を含めたスイス全体がこの問題に取り組んだという点である。以上の3点から1942年8月、9月の難民問題をめぐる議論は歴史的に重要であり、その後の1944年7月にユダヤ人を政治難民として認めるまでの、スイスの難民政策の方向性を定める重要な議論であったと考える。